ルネサンスにおけるアッティカ式の解釈について

ラファエッロと5つのオーダー

INTERPRETATIONS OF THE ATTIC STYLE IN THE RENAISSANCE

Raphael and his five Orders

飛ヶ谷 潤一郎*

Junichiro HIGAYA

Vitruvius described four styles of columns in his *De Architectura*, namely, Doric, Ionic, Corinthian and Tuscan. It is interesting to note that he also mentioned two styles of bases, i.e., Ionic and Attic, and three styles of doors, i.e., Doric, Ionic and Attic. We now need to consider what the Attic style is. It is known that the classical five Orders, abovementioned four types and Composite one, have been established from the 16th Century in Italy. This paper intends to examine the descriptions about the Attic style in the architectural treatises in the Renaissance, especially Raphael's descriptions, and to consider the relationship between the rise of the Composite Order and the fall of the Attic style.

Keywords: Attic style, Composite Order, Vitruvius, Raphael, Cesare Cesariano

アッティカ式、コンポジット式オーダー、ウィトルウィウス、ラファエッロ、チェザレ・チェザリアーノ

1. はじめに

ウィトルウィウスの『建築十書』では、ドリス式、イオニア式、コリント式、トスカナ式（以下、それぞれD式、I式、Cr式、T式と略記）の4種類の円柱に言及されている¹⁾。古典主義建築のオーダーは、15世紀のアルベルティの『建築論』以後、16世紀の三大建築書として名高いセルリオ、ヴィニョーラ、パラーディオなどの建築書によって、徐々に体系が整えられてゆく²⁾。問題となるのは、いつの間にか上述の4つに、コンポジット式（以下、Cm式と略記）を加えた5つがオーダーとして確立され、主流となって普及してゆくことである³⁾。

オーダーは、ギリシア起源のD式、I式、Cr式の3つが基本であるが、ウィトルウィウスは、「第三書」のI式柱礎に関する記述で、アッティカ式（以下、A式と略記）とI式の2種類があると述べている⁴⁾。その上、「第四書」の神殿の扉口に関する記述では、D式、I式、A式の3種類があると述べている⁵⁾。これらの記述は、現代のわれわれにとってだけでなく、ルネサンスの建築家にとっても、A式がD式やI式と同様に、オーダーの一種であるような誤解を与えたにちがいない。

さて、「オーダー」の語が、文献で最初に登場するのは、おそらくラファエッロの「教皇レオ10世宛書簡」であり、ウィトルウィウス

図1 チェザリアーノによる6種類の円柱 (Cesare Cesariano, *Vitrutio Pollione De Architectura. Libri II-IV*, ed. A. Rovetta, Vita e Pensier, Milano 2002, fig. 99.)

* 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻
研究生・博士(工学)

Research Student, Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, University of Tokyo, Dr. Eng.

でもセルリオでもないということは、あまり知られていないのではないだろうか。この書簡では、A式がオーダーの一種と見なされているが、従来のオーダー研究では、A式が考察の対象として扱われることはまれであった。そこで、本稿では、オーダーの確立において、重要な位置を占めていると思われるラファエッロ⁹⁾を中心に、ルネサンスの建築家たちが、A式をどのように解釈していたのかを、アルベルティからセルリオへといたる著名な建築書における記述から辿ってみたい。Cm式の興隆とA式の衰退は、ギリシア起源の3つの主要なオーダーに加えて、イタリア起源のT式とCm式が重視されるようになったことを示しているように思われるのである。

2.15 世紀の建築書：レオン・バッティスタ・アルベルティとフランチェスコ・ディ・ジョルジョ・マルティニ⁷⁾

アルベルティは『建築論』の「第七書」第6章で、円柱に言及している。Cm式は、ウィトルウィウスの時代には存在していなかったが、ローマの古代遺跡には数多く見られるため、アルベルティはそれをイタリア式と呼び⁸⁾、D式、I式、Cr式と同じ種類に加えている。なお、T式については、ここではほとんどふれられておらず、第4章のエトルリア神殿に関する記述でも、D式とほとんど同じであるためなのか、省略されている。アルベルティは、A式を円柱の一種と見なさず、第7章の柱礎に関する記述でも、D式とI式の2つだけで、A式は見られない⁹⁾。ウィトルウィウスの記述とは異なり、実際に古代遺跡にはD式の柱礎が多く存在していることから、アルベルティはこれをA式と同一視し、D式と呼んだのである。一方、第12章の扉口に関する記述は、D式、I式、Cr式の3つであって、ここにもA式は見られない¹⁰⁾。ウィトルウィウスによると、A

式はD式とよく似ているものであったが、アルベルティの記述からは、Cr式とD式の共通点は見出せない。それゆえ、前者のA式が、必ずしも後者のCr式に対応するとはいえないようである。ともあれ、アルベルティは、柱礎にせよ、扉口にせよ、ウィトルウィウスのA式が、D式、I式、Cr式の円柱と対応しないことを不合理と見なし、紛らわしいA式という呼び名を採用しなかったと思われる。

フランチェスコ・ディ・ジョルジョは、ウィトルウィウスやアルベルティの述べる円柱の記述を正確に理解していなかった¹¹⁾。『建築論』第二稿(フィレンツェ国立図書館蔵マリアベキアーノ手稿 Cod. Magliabechiano II. I. 141)の、神殿を扱った第4章では、D式の柱頭がI式と記されている一方、I式は2種類描かれており、そのひとつがD式となっている¹²⁾。続けて、Cr式とCm式の図が描かれているものの、後者には柱頭の名が記されていないことは、両者を同類項と判断したためであろう¹³⁾。その上、柱礎に関しては、I式やA式といった分類がされていない。『建築論』第一稿(トリノ王立図書館蔵サルツィアーノ手稿 Cod. Saluzziano 148)には、数多くの古代建築の柱礎の図版が掲載されているものの、それらの説明は省かれている¹⁴⁾。一方、扉口に関する記述は、『建築論』第二稿の第4章に見られ、ウィトルウィウスと同様に、「イオニア、ドリス、およびアッティカ式 jonichi, dorichi et ateniesi」¹⁵⁾となっているが、図版には4つの扉が描かれていて、それらがどれと一致するのかが記されていない¹⁶⁾(図2)。したがって、フランチェスコ・ディ・ジョルジョにとって、A式は円柱の一種であるのかが不可解であったようだが、A式をあまり重視していなかったという点では、アルベルティと一致しているように思われる。

3. ラファエッロ：5つのオーダーの確立者

ラファエッロの「教皇レオ10世宛書簡」(c. 1516-20)¹⁷⁾には、「すべての装飾は古代人が使用した5つのオーダー、すなわちドーリア、イオニア、コリント、トスカーナ、およびアッティカのオーダーから派生しており」¹⁸⁾とある。最初に注目すべき点は、ラファエッロが初めて「オーダー-ordini」の語を用いたことである¹⁹⁾。ウィトルウィウスは同じ意味を表すことばとして、「種類 genera」と呼んでいたが、ラファエッロ以後、建築書の類では、おもにオーダーと呼ばれるようになった²⁰⁾。また、A式が加わることによって、初めて5つのオーダーがそろった。セルリオ以後の建築家は、A式のかわりにCm式を採用して5つのオーダーとしているが²¹⁾、ラファエッロのA式とはCm式と同じなのだろうか。ラファエッロは別の箇所で、「以上の3つの(オーダーの)建造物の他にさらに2つ、すなわちアッティカおよびトスカーナ式(オーダーの)建造物がありますが、この2つは古代人にはあまり使われませんでした。アッティカ式建造物には4側面をもつ柱があり」²²⁾と述べており、円柱ではなく、角柱かまたは付柱と見なしている。これは、プリニウスの『博物誌』「第36書」におけるA式の記述を参考にしているからである²³⁾。

冒頭で述べたように、ウィトルウィウスは、A式について、上述の「第三書」における柱礎と、「第四書」における扉口に言及しているだけである。それゆえ、前者の場合は円柱で、後者の場合は円柱よりむしろ付柱になると思われ、プリニウスのように、必ずしも角柱や付柱でなくてもよいことになる。しかしながら、結局、ウィトルウィウスもプリニウスも、柱頭などの細部に関しては、何も語つ

図2 フランチェスコ・ディ・ジョルジョによる扉口の例 (Francesco di Giorgio Martini, *Trattati di architettura, ingegneria e arte militare*, ed. Maltese, 2 vols., Polifilo, Milano 1967, vol. 2, f. 43v tav. 238.)

ておらず、ラファエッロもまたしかりである。A 式がどのようなかたちであったのかは、すでに見てきたように、15 世紀の建築家たちも解釈に腐心し、考古学的厳密さを重視するラファエッロは、この点にあまり深入りしなかったようである。「古代人にはあまり使われませんでした」という箇所からは、ローマの古代遺跡に Cm 式は数多く見られるので、ラファエッロが理解している A 式は、Cm 式とは別のものを指しているようである。

ラファエッロは、また「イオニアとコリント、ドーリアとコリント、トスカナとドーリアといったように複合の様式で構築された建築が数多く存在していますが」²⁴⁾と述べている。ここでは、ordini という語は用いられていないが、「複合の様式 composti di più maniere」とは、Cm 式を示しているのだろうか²⁵⁾。だが、Cm 式は、I 式と Cr 式の 2 つの柱頭を組み合わせたものを指すのが通例である。柱頭どうしてではなく、エンタブラチュアとの組み合わせなら、D 式と Cr 式の組み合わせも可能で²⁶⁾、実際にラファエッロによるオーダーの使用は、必ずしもウィトルウィウスの原則に忠実だったわけではない。あるいは、建物全体における複数のオーダーの使用と考えることもできる²⁷⁾。ウィトルウィウスは、「第四書」のエトルリア神殿に関する記述で、柱の配置という点で、複数の様式からなるヴァリエーションを認めた²⁸⁾。また、コロッセウムのように、ひとつの建物に、複数のオーダーを使用する例も少なくない。するとラファエッロは、Cm 式には何も言及しなかったのか、Cm 式をどのように呼んでいたのか、という疑問が残るが、彼の作品に Cm 式があまり用いられていないことも²⁹⁾、これらの問への返答を難しくしている。確かなのは、後にセルリオの建築書『第四書』(ヴェネツィア 1537) では、ルスティカ仕上げがオーダーの一種と見なされ、T 式と組み合わせられたことと³⁰⁾、I 式と Cr 式の柱頭の複合形式が Cm 式(図 7)と呼ばれたことだけであって、ラファエッロがこれらへの発展を示唆した可能性もあるとしかいうことはできない。

ラファエッロは、ファビオ・カルヴォ訳のイタリア語版『ウィトルウィウス』(1514-15)³¹⁾の手稿を所有し、注解を書き込んでいた。カルヴォは、A 式の柱礎について、「アッティカ式、つまりアテネ式、あるいはドリス式で、アッティクルゲ式という *athica cioè atheniense, over doric, che se dice atigurge*」³²⁾と述べているように、D 式と同じものと解釈していたようである。ウィトルウィウスによる D 式円柱の記述では、柱礎は存在しないことになっているものの、実際には、ローマの古代遺跡でそのような例は、マルケルス劇場くらいしか存在しておらず、むしろ柱礎をもつものが大半である。アルベルティ以後の多くの建築家は、現存遺構とウィトルウィウスの記述の不一致の理解に悩まされたが、結局、誰もが D 式でも柱礎を採用した。カルヴォも、このことには気づいてははずで、アルベルティと同様に、現存する D 式の柱礎を、ウィトルウィウスの述べる A 式と同一視したのであろう。そして、ラファエッロもこの解釈にしたがったと思われる。なお、ウィトルウィウスは、Cr 式の柱礎には言及していない。なぜなら、「コリント式の円柱は、柱頭を除いて、全てイオニア式の円柱と同じジュンメトリアをとる」³³⁾からである。

一方、扉口に関しては、どのように解釈すればよいのであろうか。カルヴォ版『ウィトルウィウス』では、「アッティカ式、つまりアテネ式は、ドリス式と同じ比例と方法でつくられる。これに加えて、コルサが、キューマティウムの下で扉枠の周りへと巡らされる」³⁴⁾

図3.4 フラ・ジョコンドによるアッティカ式柱礎、およびドリス式とコリント式の円柱(上下の順, Fra Giocondo, *M. Vitruvius per locundum Solutor Castigator factus cum figuris et tabula ut iam legi et intelligi possit*, Venezia 1511, c. 28v および c. 34r.)

とある。したがって、A 式扉口は、D 式のそれとは幾分異なるものの、比例などが同じであることから、カルヴォは、柱礎の場合と同様に、それらの違いをさほど重視していなかったとも想像できる。しかし、ウィトルウィウスは、円柱の場合に D 式、I 式、Cr 式の 3 種類を基本としておきながら、扉口の場合は、なぜ Cr 式の代わりに A 式としたのだろうか、という疑問を感じたのは、前述のアルベルティだけではあるまい。実際、ラファエッロはこの箇所では、「第 3 のもの〔つまり、A 式〕は、コリント式の神殿につくられることを要する」³⁵⁾という注解を書き込んでいる。したがって、ラファエッロは、アルベルティとは異なり、A 式扉口を Cr 式とは呼ばなかったものの、A 式を Cr 式に置き換えられるものと見なした。だが、結局、A 式オーダーは、D 式、Cr 式、Cm 式のいずれとも一致するわけではなく、不明のままである。

4. 図版入りウィトルウィウスの『建築十書』: フラ・ジョヴァンニ・ジョコンドとチェザレ・チェザリアーノ

ウィトルウィウスの『建築十書』は、当時の建築家にとって、必読の書であったにもかかわらず、ラテン語で図版がないというのは、

大きな欠点であった³⁶⁾。フラ・ジョコンド版『ウィトルウィウス』(ヴェネツィア 1511)³⁷⁾は、ラテン語で、注解も施されていないものの、初めて図版が掲載されたことで、出版物としては大きな成功を収めた。「第三書」第3章³⁸⁾のA式柱礎の図(図3、c. 28v)では、柱礎の立面図と円柱の断面図しか描かれておらず、I式柱礎の図(c. 29r)もまた同様である。これらの図は、フラ・ジョコンドが、ウィトルウィウスの記述をかなり正確に理解していることを示しているが、柱頭と柱礎の不一致には、彼も理解に難渋したにちがいない。「第四書」第1章に見られるI式とCr式(c. 32r)、ならびにD式とCr式³⁹⁾の円柱の比較図(図4、c. 34r)では、ともにCr式にA式柱礎 *spira attica* が用いられており、両者の組み合わせが適当と見なしたのであろう。しかし、後者の場合は、正確には柱頭がCr式、柱身がI式、柱礎がA式となっているのである。なお、「第四書」第6章の扉口については、D式(c. 40r)とI式の図(c. 40v)だけで、A式の図は省かれている。

チェザリアーノ版『ウィトルウィウス』(コモ 1521)⁴⁰⁾は、最初の俗語訳で、注解も施されており、図版の質もフラ・ジョコンド版をはるかに凌駕する。「第四書」第1章では、6種類の円柱を、同じスケールで並列して描いた図(図1、c. 62r)が見られる。2本の円柱を比較した図は、フラ・ジョコンドも描いているが、全ての円柱を比較した図は、おそらくチェザリアーノが最初に考案したものであり、以後、セルリオやヴィニョーラなどにも踏襲されてゆく。ただし、*ordini* の語は用いておらず、ウィトルウィウスにしたがって、そのまま *generatione* と直訳している。この図版では、D式は男性版と女性版と2つあり、I式、Cr式、A式、T式のプロポーションは全て同じであることなどが、特徴として挙げられる。一方、A式に関しては、Cr式とよく似た柱頭が左右で半分ずつ2種類描かれていて、柱身には浮彫り装飾が施された角柱または付柱となっている。したがって、プリニウスの記述にしたがいがら、記述のない柱頭の形と柱身の装飾は、彼が自ら考案したことになるが、Cm式とは異なっている。

チェザリアーノは、この図について、以下の注解を記している。「Fの印がついたアッティカ式円柱は、[円柱底面の直径に対する]円柱の高さの比が、イオニア式やコリント式と同じである。つまり[直径が1に対し]10のモジュールであり、さらにこれとその他、付柱やヴォールト天井または格間が結びつき、合致するときに、一段と大きなモジュール[つまり細身のプロポーション]となる。(中略)これらの柱頭は、ほぼコリント式の美と同じであり、さまざまな形につくられる。しかし、シュンメトリアに関しては、コリント式で語られたのとは異なり、ほとんど論じられていない」⁴¹⁾([]内は訳者の補足)。次に、「第三書」第3章のA式柱礎に関する注解では、「アッティカ式またはアテネ式は、コリント式と同じシュンメトリアとなるであろう」⁴²⁾とある。図(図5、c. 57r)を見ると、柱の断面は角柱か付柱で、右半分では縦溝が刻まれているのに対し、左半分では柱身を粹取りするかたちとなっている。なお、I式柱礎の図(c. 57v)では、柱の断面が描かれておらず、円柱が角柱であるかは不明である。一方、「第四書」第6章の扉口に関する注解では、「アッティカ式の解釈は、この部分では、ほぼコリント式で用いたシュンメトリアとなるように思われる」⁴³⁾とある。ただし、図版はD式(図6、c. 68v)とI式の扉口(c. 69r)しかないので、A式の姿

図5.6 チェザリアーノによるアッティカ式柱礎、およびドリス式扉口(上下の順、Cesare Cesariano, ed. A. Rovetta, cit., fig. 87 および fig. 120.)

はつまびらかでない。

以上より、フラ・ジョコンドとチェザリアーノは、ともにA式をコリント式とほぼ同一視していたことがわかる。当時は、T式がD式と似ているように、「Cm式」はCr式と似ていると考えられていた。チェザリアーノが描いたさまざまな柱頭の図に、正確なCm式が見られないのは、彼がローマを訪れておらず、かつブラマンテのミラノの作品には、Cm式があまり使われていないからであろう⁴⁴⁾。ラファエッロとチェザリアーノは、ともにブラマンテの弟子という共通点があるとはいえ、両者の間には、おそらく何の関係もなかった。興味深い点は、ラファエッロが用いた「オーダー」ということばが、チェザリアーノによる円柱の比較形式と組み合わせられて、セルリオ以後の建築家に引き継がれていくことである。

5. おわりに：コンポジット式オーダーの成立へ

ウィトルウィウスが述べているA式を、ラファエッロ以後の建築家たちが、Cr式と似ているCm式と見なすことはあっただろうか。柱礎や扉口におけるA式は、しばしばCr式と同一視されながらも、次第にオーダーの一種としては扱われなくなる。セルリオは、A式柱礎をD式柱礎と呼んだ⁴⁵⁾。そして、扉口については、オーダーに関する記述と同じ箇所の説明され、両者が対応するように、D式と

I 式に、新たに T 式と Cr 式が加わるかわりに、A 式が省かれた⁴⁶⁾。一方、古代遺跡に数多く見られる Cm 式は、アルベルティ以後、呼び名を変えつつも、ベルツィやアントニオ・ダ・サンガッロ・イル・ジョーヴァネの建築作品にはしばしば用いられるようになり、セルリオ以後には、この名が定着する。セルリオは、エトルリア起源の T 式を、フィレンツェによく見られるルスティカ仕上げと組み合わせることによって、イタリアの優越性を前面に押し出したが⁴⁷⁾、A 式は別名アテネ式で、ギリシア起源であるゆえにオーダーの一種としての座を、同じくイタリア起源の Cm 式に譲ったという解釈も可能ではないだろうか。この書は、すでに 1528 年の時点で、Cm 式が加わったかたちで大方できあがっていたことから⁴⁸⁾、1520 年のラファエッロの死後、1520 年代半ば頃までに、5 つのオーダーという規範が成立したと思われる。この時代は、一般にはマニエリスムの始まりと見なされているが、ラファエッロ亡き後も、ベルツィやサンガッロなどにより、ウィトルウィウスや古代建築の研究という面で、一段と大きな成果があげられたという一面を見逃してはならないと思う⁴⁹⁾。

図7 セルリオによる5つのオーダー (Sebastiano Serlio, *L'Architettura. I libri I-VII e Extraordinario nelle prime edizioni*, ed. F. P. Fiore, 2 vols., Polifilo, Milano 2001, Lib. IV, c. 6.)

注

- ¹⁾ I 式は「第三書」、残りは「第四書」で扱われている。現代の校訂版としては Vitruvio, *De Architectura*, ed. P. Gros, 2 vols., Einaudi, Torino 1997 を参照した。
- ²⁾ ルネサンス建築のオーダーに関する研究は多く、建築遺構を扱ったものでは、建築家のモノグラフで個別に言及されることが多い。一方、建築書などの理論を扱った例としては、*Les traités d'architecture de la Renaissance*, ed. J. Guillaume, Picard, Paris 1988 や *Paper Palaces. The Rise of the Renaissance Architectural Treatise*, eds. V. Hart, P. Hicks, Yale U. P., New Haven-London 1998 などの優れた論文集、古代から現代までの建築理論を扱った大著 H. W. Kruft, *A History of Architectural Theory from Vitruvius to the Present*, Eng. ed., Princeton Architectural Press, Princeton-London 1994 などが挙げられ、オーダーにも言及されている。わが国でも、オーダーの研究は、ヴィニョーラやパラディオの建築書の研究と並行して行われてきた半面、建築書を著して

いないブルネスキやブラマンテのオーダーの研究は、軽視されがちのようである。だが、一般には理論と実践の両面を論じた研究が多く、邦訳書で親しまれている J. サマーソン、鈴木博之訳『古典主義建築の系譜』(中央公論美術出版 1976) や、E. Forssman, *Dorico, Ionico, Corinzio nell'architettura del Rinascimento*, It. ed., Laterza, Roma-Bari 1973 は古典的名著といえる。前者について説明の必要はないと思うが、後者はギリシア起源の3つのオーダーを中心に、16~18 世紀までを扱ったものである。J. Onians, *Bearers of Meaning. The Classical Orders in Antiquity, the Middle Ages and the Renaissance*, Princeton U. P., Princeton 1988 および A. A. Payne, *The Architectural Treatise in the Italian Renaissance. Architectural Invention, Ornament, and Literary Culture*, Cambridge U. P., Cambridge-New York 1999 は、ともにウィトルウィウスの美の原則のひとつであるデコルに着目し、古代から 16 世紀までを論じた興味深い研究である。前者は中世建築にも言及されているのに対し、後者はウィトルウィウスとルネサンスの建築書に限定されているのが特徴である。C. Thoenes, H. Günther, "Gli ordini architettonici: rinascita o invenzione?," in *Roma e l'antico nell'arte e nella cultura del Cinquecento*, ed. M. Fagiolo, Istituto della Enciclopedia Italiana, Roma 1985, pp. 261-310 は、オーダーだけでなく、ルネサンスにおける古代建築の解釈について論じた興味深い論稿である。ブルスキの2つの論稿 A. Bruschi, "L'Antico e la riscoperta degli ordini architettonici nella prima metà del Quattrocento. Storia e problemi," in *Roma, centro ideale della cultura dell'Antico nei secoli XV e XVI*, ed. D. Squarzina, Electa, Milano 1989, pp. 410-434 および Idem, "L'antico e il processo di identificazione degli ordini nella seconda metà del Quattrocento," in *L'emploi des ordres dans l'architecture de la Renaissance*, ed. J. Guillaume, Picard, Paris 1992, pp. 11-57 は、連作と考えられる。オーダーは、柱と梁によって成立するものであるにもかかわらず、一般にオーダー研究では、柱頭や比例関係が重視されがちであるが、15 世紀の遺構と建築書に見られるオーダーが、エンタブラチュアも含めて詳細に論じられている。

- ³⁾ Cm 式の起源に関する優れた論稿は Y. Pauwels, "Les origines de l'ordre composite," *Annali di architettura*, 1, 1989, pp. 29-46 で、本稿もこの研究に負うところが大きい。ルネサンスの建築遺構、建築書に見られる Cm 式を辿りながら、5 つのオーダーを確立したセルリオの役割に重点が置かれている。Cm 式柱頭は、Cr 式と似ているため、ルネサンスの建築家には同一視されることが少なくなかったことや、コロッセウムの第4層のように Cr 式の上にオーダーが積み重ねられた場合には、実際には同じ Cr 式であるのに、上層のオーダーがコンポジット式と見なされたことなどが論じられている。ただし、A 式には、少ししかふれられていない (pp. 38-39)。
- ⁴⁾ Vitruvio, ed. P. Gros, cit., Lib. III, Cap. 5, pp. 254-255. 一般にオーダー研究では柱礎は無視されがちであるが、I 式柱礎に関する論稿 F. Lemerle, Y. Pauwels, "L'ionique: un ordre en quête de base," *Annali di architettura*, 3, 1991, pp. 7-13 は興味深い。A 式柱礎には、あまり言及されていないが、ルネサンスの建築家たちが、I 式に2種類の柱礎があることに困惑し、いずれも全てのオーダーに使用されたことが指摘されている。ちなみに、以下の邦訳書では、柱礎を「アッティカ風」と訳し分けているが、原文では円柱、柱礎、扉口のいずれも同じなので、全て「アッティカ式」に統一した。森田慶一訳註『ウィトルウィウス建築書』〈普及版〉(東海大学出版会 1979) 81 頁。
- ⁵⁾ Vitruvio, ed. P. Gros, cit., Lib. IV, Cap. 6, pp. 388-389. D 式と A 式は互いによく似ていて、区別しにくい。I 式の場合には、両脇にスクロール状の持送りがついているのが特徴である。ルネサンスにおける I 式の扉口については、C. L. Frommel, "La porta ionica nel Rinascimento," in *Studi in onore di Renato Cevese*, eds. G. Beltrami, et al., Cisa, Vicenza 2000, pp. 251-292 を参照。
- ⁶⁾ 建築家としてのラファエッロに関する研究は、*Raffaello architetto*, eds. C. L. Frommel et al., Electa, Milano 1984 が基本文献である。本稿で扱うラファエッロのオーダーや古代建築の解釈については、この書の H. Burns, "Raffaello <quell'antique architectura>," in *Ibidem*, pp. 381-404 および P. N. Pagliara et al., "Lo studio di Vitruvio e dei testi antichi," in *Ibidem*, pp. 424-428 で中心に論じられている。他には、ウィトルウィウスとの関連でラファエッロについて論じた論稿として、P. N. Pagliara, "Vitruvio da testo a Canone," in *Memoria dell'antico nell'arte italiana*, ed. S. Settis, 3 vols., Einaudi, Torino 1986, vol. 3, pp. 3-85, at pp. 38-45; G. Morolli, "Oltre Vitruvio: il Trattato nuovo di Raffaello," in *Studi su Raffaello*, eds. M. Sambucco Hamoud, M. L. Strocchi, 2 vols., Quattroventi, Urbino 1987, pp. 245-264; I. D. Rowland, "Vitruvius in Print and in Vernacular Translation: Fra Giocondo, Bramante, Raphael and Cesare Cesariano," in *Paper Palaces*, cit., pp. 105-121 など重要な研究といえる。また、ラファエッロのオーダーについて論じた C. L. Frommel, "Raffaello e gli ordini architettonici," in *L'emploi des ordres...*, cit., pp. 119-136 や、古代文献の読解に関して、ラファエッロの第二の協力者である教皇庁の人文主義者アンジェロ・コロッチに焦点を当てた I. D. Rowland, "Raphael, Angelo Colocci and the Genesis of the Architectural Orders," *The Art Bulletin*, 76, 1994, pp. 81-104 など興味深い論稿である。

- ⁷⁾ 15 世紀における円柱の一種としての A 式に関する言及は、わずかながら、アントニオ・マネッティの『ブルネレスキ伝』にも見られ、T 式とともに 5 種類の円柱が挙げられている。だが、具体的な A 式のかたちについては何も記されていない。マネッティ、浅井朋子訳『ブルネレスキ伝』（中央公論美術出版 1989）85 頁。
- ⁸⁾ L. B. Alberti, *De re aedificatoria*, ed. G. Orlandi, 2 vols., Polifilo, Milano 1966, pp. 564-565. 5 つのオーダーが記されたヴァティカン図書館蔵キーズ手稿 *Manoscritto Chigiano M VII 149* は、かつてはアルベルティの作と考えられていたけれども、現在は 16 世紀前半のセルリオ周辺の建築家によるものと見なされている。ここでは、Cm 式はラテン式 *opera latina* と記されている。F. Borsi, “I cinque ordini architettonici e L. B. Alberti,” *Studi e Documenti di Architettura*, n. 1, 1978, pp. 57-130.
- ⁹⁾ L. B. Alberti, *op. cit.*, pp. 568-573.
- ¹⁰⁾ *Ibidem*, pp. 616-625.
- ¹¹⁾ フランチェスコ・ディ・ジョルジョは、ウィトルウィウスの翻訳も試みた。Il “*Vitruvio Magliabechiano*” di Francesco di Giorgio, ed. G. Scaglia, Gonnelli, Firenze 1985. を参照。フランチェスコ・ディ・ジョルジョのオーダーに関する研究は J. Onians, *Bearers of Meaning*, cit., pp. 171-181; F. P. Fiore, “Gli ordini nell’architettura di Francesco di Giorgio,” in *L’emploi des ordres...*, cit., pp. 59-68; A. A. Payne, *op. cit.*, pp. 89-110. を参照。ローマ「ラ・サピエンツァ」大学フランチェスコ・パオロ・フィオーレ教授からは、ルネサンス建築について、ご教示にあずかった。心から感謝申し上げる。
- ¹²⁾ Francesco di Giorgio Martini, *Trattati di architettura, ingegneria e arte militare*, ed. Maltese, 2 vols., Polifilo, Milano 1967, vol. 2, f. 33 tav. 219.
- ¹³⁾ *Ibidem*, vol. 2, f. 33 v tav. 220, f. 34 tav. 221.
- ¹⁴⁾ *Ibidem*, vol. 1, ff. 99-100 tavv. 183-186.
- ¹⁵⁾ *Ibidem*, vol. 2, p. 405.
- ¹⁶⁾ *Ibidem*, vol. 2, f. 43v tav. 238.
- ¹⁷⁾ 教皇レオ 10 世宛書簡は、Cod. It. 37b としてミュンヘン国立バイエルン図書館に所蔵されており、R. Bonelli (ed.), “Lettera a Leone X,” in *Scritti rinascimentali di architettura*, eds. A. Bruschi et al., Polifilo, Milano 1978, pp. 461-484. 他、いくつかの校訂版がある。この書簡の邦訳は、小佐野重利、姜雄『ラファエッロと古代ローマ建築：教皇レオ 10 世宛書簡に関する研究を中心に』（中央公論美術出版 1993）に所収。本稿におけるこの書簡の引用は、邦訳書にしたがった。東京大学小佐野教授からは、研究指導以外でも多大なご恩恵にあずかった。心から感謝申し上げます。
- ¹⁸⁾ 小佐野他前掲訳書、21 頁。
- ¹⁹⁾ J. Onians, *Bearers of Meaning*, cit., p. 247. テーネスが指摘しているように、正確にはフィラレテが最初であるが（Filarete, *Trattato di architettura*, eds. A. M. Finoli, L. Grassi, 2 vols., Polifilo, Milano 1972, Lib. I, pp. 16-17, Lib. II, p. 39）、円柱を示す場合にこの語が用いられることは少ない。C. Thoenes, “Gli ordini architettonici: rinascita o invenzione? parte prima,” cit., pp. 261-271, at pp. 265-266 note 33.
- ²⁰⁾ ウィトルウィウスの genera は、ルネサンス期には、他にもさまざまなことばで用いられた。C. Thoenes, “Gli ordini architettonici,” cit., pp. 265-266. を参照。なお、セルリオの建築書『第四書』には、ordine の語がしばしば登場するようになるが、同じ意味を示す語として、「様式」、「手法」などを意味する maniera も 5 つのオーダーを比較した図（図 7）などで、ひんばんに用いられている。Sebastiano Serlio, *l'Architettura. I libri I-VII e Extraordinario nelle prime edizioni*, ed. F. P. Fiore, 2 vols., Polifilo, Milano 2001, Lib. IV, c. 6.
- ²¹⁾ セルリオのオーダーに関する研究は H. Günther, “Serlio e gli ordini architettonici,” in *Sebastiano Serlio*, ed. C. Thoenes, Electa, Milano 1989, pp. 154-168. 他多数。
- ²²⁾ 小佐野他前掲訳書、22 頁。
- ²³⁾ Plinio, *Storia Naturale*, vol. 5, eds. A. Corso et al., Einaudi, Torino 1986, Lib. XXXVI, pp. 714-715. 小佐野他前掲訳書、65~66 頁 注 90。
- ²⁴⁾ 小佐野他前掲訳書、22 頁。
- ²⁵⁾ 小佐野他前掲訳書（66~67 頁 注 92、146~147 頁、165 頁 注 95）および A. A. Payne, *op. cit.*, pp. 132-133. では、この箇所が CM 式への言及であるという説をとっている。
- ²⁶⁾ ただし、このような手法は、ウィトルウィウスのデコルの原則に反するものであり、ラファエッロも、ファビオ・カルヴォ版『ウィトルウィウス』の「第一書」第 2 章において「ある様式を別の様式にも転用すると不都合を生じる qual cose non siano conveniente trasferirle d’una in altra opera」という注解を書き込んでいる。Vitruvio e Raffaello. Il “*De Architectura*” di Vitruvio nella traduzione inedita di Fabio Calvo ravennate, eds. V. Fontana, P. Morachiello, Officina, Roma 1975, p. 80.
- ²⁷⁾ フロンメルもこのような解釈をとっている。C. L. Frommel, “Raffaello e gli ordini architettonici,” cit., p. 129.
- ²⁸⁾ Vitruvio, ed. P. Gros, cit., pp. 394-395. 小佐野他前掲訳書（66 頁 注 92）でも、この部分にはふれられている。
- ²⁹⁾ 建築作品にはほとんど見られず、ヴァティカン宮殿の「火災の間」の壁画〈ボルゴの火災〉に見られる程度である。
- ³⁰⁾ S. Serlio, ed. F. P. Fiore, cit., Lib. IV, Cap. 5.
- ³¹⁾ この書は、レオ 10 世宛書簡と同じ図書館で所蔵されている 2 つのイタリア語の手稿（Cod. It. 37, 37a）で、*Vitruvio e Raffaello*. cit. に所収（注 26）。
- ³²⁾ *Vitruvio e Raffaello*, cit., p. 159.
- ³³⁾ “Columnae corinthiae praeter capitula omnes symmetrias habent uti ionicae,” Vitruvio, ed. P. Gros, cit., Lib. III, Cap. 1, pp. 368-369.
- ³⁴⁾ “le attigurge, cioè atheniese, se fanno con quelle medesime ragione e modi che le dorice; oltre di questo le corse sotto li cimazii in li antepagamenti se circundino e mandinsi intorno intorno,” *Vitruvio e Raffaello*, cit., p. 188.
- ³⁵⁾ “terza che si richiede fare alle ede corinthie,” *Ibidem*, p. 188.
- ³⁶⁾ ルネサンスにおける『建築十書』の出版については、拙稿「ルネサンスにおけるエトルリア神殿の解釈の変遷：アルベルティからパッパロまで」を参照（『建築史学』42 号、2004 年 3 月掲載予定）。
- ³⁷⁾ Fra Giocondo, *M. Vitruvius per locundum Solutor Castigator factus cum figuris et tabula ut iam legi et intelligi possit*, Venezia 1511.
- ³⁸⁾ フラ・ジョコンドの章立ては、現代の校訂版とは多少異なっており、後述のチェザリアーノは、フラ・ジョコンドの章立てにしたがった。
- ³⁹⁾ フラ・ジョコンドの Cr 式柱頭は、他の図（cc. 32r, 35r）でも両端の渦巻きが比較的大きめであり、Cm 式と同類項と見なしていたと思われる。
- ⁴⁰⁾ チェザリアーノ版『ウィトルウィウス』は、注解や解説が施された現代の校訂版がいくつか出版されているが、筆者がおもに参照したのは、*Cesare Cesariano. Vitruvio Pollione De Architectura. Libri II-IV. I materiali, i templi, gli ordini*, ed. A. Rovetta, Vita e Pensiero, Milano 2002. である。この書については、拙稿「『チェザリアーノ版ウィトルウィウス』について：ロヴェッタ校注の最新版の紹介を中心に」を参照（『建築史学』42 号、2004 年 3 月掲載予定）。
- ⁴¹⁾ “La attigurga columna signata F si fa alta per ratione del suo scapo quanto sono le ioniche e le corinthie; ancora infine a deci moduli e più quando questa e le altre sono associate et aderenti con li parastatice infine a le fornice aut lacunarii.... Li capitelli de queste sono quasi di tanta venustate quanto li corinthii e sono facti in vari modi, ma quasi però con poca comentione de simmetrie differente, ut dictum est, da li corinthii,” *Cesare Cesariano*, ed. A. Rovetta, cit., pp. 243-244.
- ⁴²⁾ “attica seu ateniense, quale sarà etiam in la simmetria corinthia,” *Ibidem*, p. 205.
- ⁴³⁾ “In questa parte appare sia intelligenda attigurga quasi per corinthia per le simmetrie che hano usato,” *Ibidem*, p. 304.
- ⁴⁴⁾ ブラマンテのオーダーに関する研究は多いけれども、C. Denker Nesselrath, *Die Säuleordnungen bei Bramante*, Wernersche Verlagsgesellschaft, Worms 1990 が最もくわしい。
- ⁴⁵⁾ S. Serlio, ed. F. P. Fiore, cit., Lib. IV, Cap. 6, c. 21.
- ⁴⁶⁾ なぜか、Cm 式扉口というものはない。
- ⁴⁷⁾ T 式オーダーと民族性については J. S. Ackerman, “The Tuscan/Rustic Order. A Study in the Metaphorical Language of Architecture,” in *Idem, Distance Points*, MIT Press, Cambridge, Mass.-London 1992, pp. 495-545 が興味深い。また、邦語文献では、金山弘昌「16 世紀フィレンツェにおける粗面仕上げ切石積みの解釈」『美学』205 号、2001 年、42~55 頁が挙げられる。日本橋学館大学金山講師からは、しばしば貴重な助言をいただいた。心から感謝申し上げます。
- ⁴⁸⁾ セルリオは、ローマ劫掠の後、1528 年からヴェネツィアに移住し、同年に『建築書』を出版する予定で、ヴェネツィア共和国政府に宛てた 9 月 18 日付の著作権獲得の請願書が知られている。W. B. Dinsmoor, “The Literary Remains of Sebastiano Serlio,” *The Art Bulletin*, 24, 1942, pp. 55-91, at pp. 64-66; D. Howard, “Sebastiano Serlio’s Venetian Copyrights,” *The Burlington Magazine*, 115, 1973, pp. 512-516. を参照。請願書の原文は、後者に所収（p. 512）。
- ⁴⁹⁾ ベルツィとサンガッロは、ともにラファエッロの死後、サン・ピエトロ大聖堂の建築家の地位を引き継いだ。彼らが、古代遺跡やウィトルウィウスの研究に熱心に取り組んだことは、現在ウッフィーツィ美術館素描版画室に所蔵されている膨大な建築素描が示すとおりである。ベルツィについては、拙稿 2003 年度東京大学大学院学位請求論文『15 世紀末から 16 世紀初期のローマにおける古代建築の解釈に関する研究：ウィトルウィウスの三原則と誤解の系譜を中心に』に、ヴァザーリの「ベルツィ伝」の抄訳と解説を掲載した。サンガッロについては、オーダーや古代建築との関連で重要な、パリアーノによる一連の研究を挙げておくにとどめる。P. N. Pagliara, “Vitruvio da testo a Canone,” cit., pp. 46-55; *Idem*, “Studi e pratica vitruviana di Antonio da Sangallo il Giovane e di suo fratello Giovanni Battista,” in *Les traités...*, cit., pp. 179-206; *Idem*, “Antonio da Sangallo il Giovane e gli ordini,” in *L’emploi des ordres...*, cit., pp. 137-156.

(2003 年 11 月 10 日原稿受理、2004 年 3 月 24 日採用決定)